学際的ワークショップ 『精神分析の知のリンクにむけて』
第八回「心、身体、時間」

心、身体、時間とは何か、それらは相互にどのように関係しているか―この問いは精神分析理論の中核に位置している。フロイトは初期の「心的装置」で、記憶痕跡を手がかりに、この問題に先鞭をつけた。その後、彼は自我、エス、超自我からなる「第二局所論」で、この問題を新たな角度で再考し、晩年に至るまで精神分析固有の時間・空間の理論化を試みた。

「二つの身体から心が生まれる」というのは、ウィニコット理論に依拠しながら、フロイトの考察を引き継いだ現代の精神分析家アンドレ・グリーンのテーゼである。二つの身体というのは、母と子の身体であり、子供の心（皮膚自我）に、母親の手（ホールディング）のリズムが内在することで心が生まれる。さらにグリーンの影響を受けたローランス・カーンは、フロイトの「事後性」概念のもととなる記憶の痕跡説を批判し、時間を痕跡からではなく、「動きが作るかたち」の点から捉え直している。これらの論点は、臨床的な妥当性を持つが、その理論的基盤は脆弱と言わざるを得ない。

平井靖史氏は快著『世界は時間でできている』（青土社）で、時間の謎を一望のもとに解明しうる、明快な構想を提起している。その影響力は、哲学に留まらず、心理学、芸術、人工知能など多領域に広がっている。氏の理論はベルクソンに依拠しつつも、ベルクソンを超え、ミッシング・リンクと考えられていたベルクソンとフロイトの間をつなぎ、精神分析の理論的枠組みを更新しうる可能性を孕んでいる。

一方、小倉拓也氏は『カオスに抗する闘いードゥルーズ・精神分析・現象学』（人文書院）で、ラカンのシニフィアン概念を批判し、形象（かたち）概念を中心に据えて、平井氏とは異なった方法で、記憶、時間の問題にアプローチしている。

今回のワークショップでは、平井氏、小倉氏をお招きし、臨床家との対話を試みる。このテーマは一見抽象論に映るかもしれないが、まさに私たちの臨床的行為のただ中で問題となっている事柄なのである。

日　　時：10 月 9 日（月、祭日）13：00～17：00
場　　所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター
方　　法：ハイブリッド形式（コロナ感染状況によって変更あり）
参加対象：どなたでも参加できます。
発 表 者：平井靖史（慶應義塾大学）
　　：小倉拓也（秋田大学）
討 論 者：十川幸司（個人開業）
司　　会：藤山直樹（個人開業）
参 加 費：3000 円
定　　員：100 名
申し込み方法：2023 年 10 月 2 日（月）までに小寺記念精神分析研究財団事務局に e-mail でお申し込み下さい（kodera.kt@nifty.com）。表題は「学際的ワークショップ申し込み」とし、メール本文に、氏名、住所、ご所属とご身分（学生、 教員、会社員など）お書き下さい。また、**同時に参加方法（会場・オンライン）どちらかをお知らせ下さい。**返信メールにて、お振込みのご案内をさせていただきます。

主催 小寺記念精神分析研究財団